赤堀

春色連理梅第二編序

夫人情と公道と両全ふこと難し。公道を
依べ人情闕。人情ふ順べ公道虧ると墨翟も。
這岐道ゆゑ泣涕し。其人情公道の両全
ふこと小册の趣向。人を慕ひ妻を想ふ。

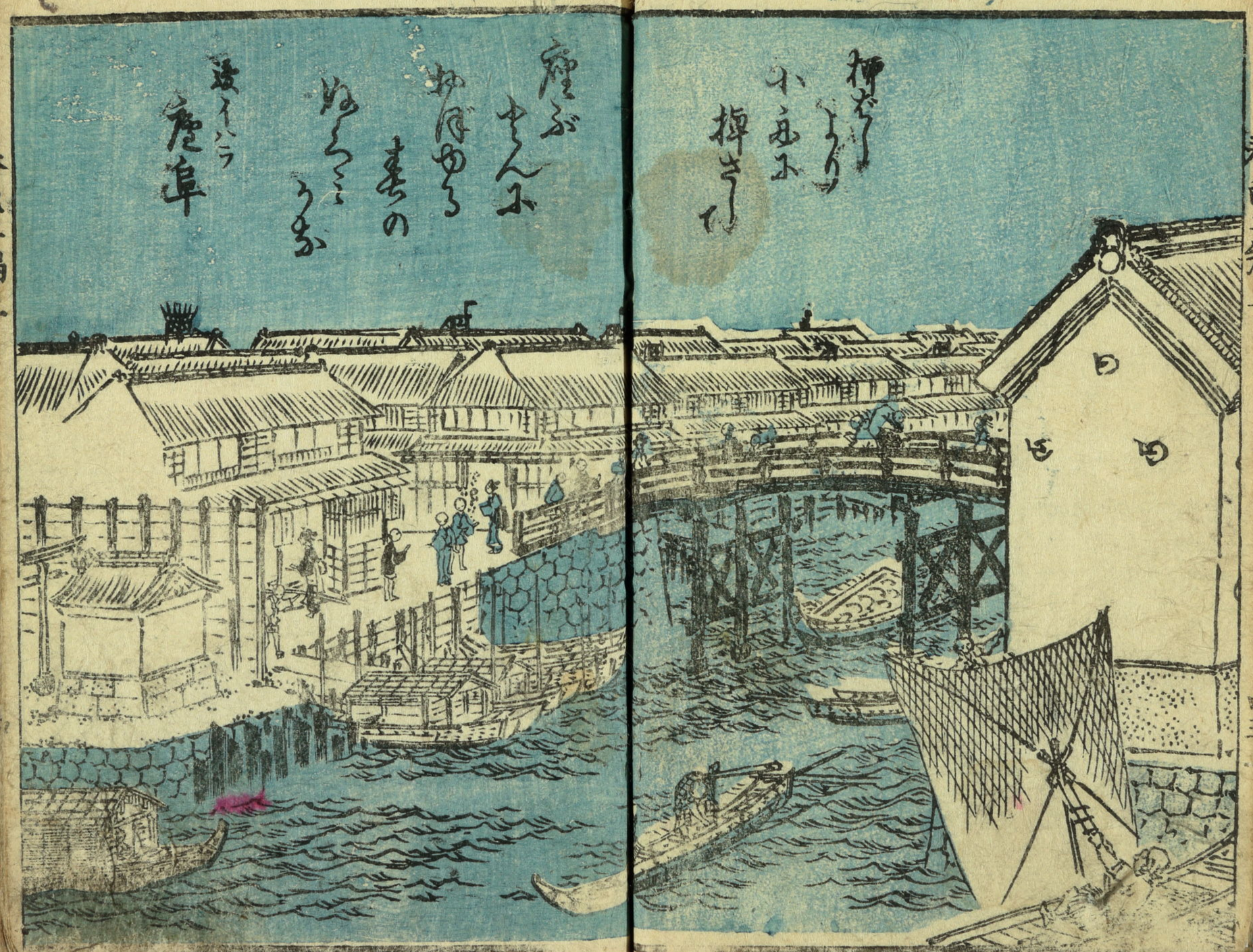
世間一統の人情あり。夫婦ゝ道の大倫也。
相互ゝ戀人和合し。子孫を繁さゝ公道
あり。是人情と公道の両全ゝ又何
ぞやと自已得意の作文をヅト承知の板
元ゞ義冊ゝ刻表本紀安童男達ゝ御覽
ゝ入ゝ利を得と謀る人情速ゝ壽梓紙
成扨爺ゞ梅星頭窗をたきして爾云。

二世梅暮里主人
鈴亭梅星爺戲誌

河内蔵

風ふく沢をるまち折掛の糸ふ金を縫揮も軟を
岩ひ姉を育つる浪世ふ欲〜泥ふ濁る
んもつとあの身者をも玉と敷くら
ゆひ中りあきお寒の絡あて
そ〜身の罪ふちわぐる
べし喫泥中の
蓮ふ
比〜紅色
うゝね
艶若の
お滝

濃りを吏〜紅葉をちり
軟ふ孝あり他ふ恥ある身を慶
らさ〜上を紋ひ中を憐むれ者の
弟揚物ふさ〜ぶ汗体形く
優〜けまべ白薔薇薔の
皆別ふく女ふをうまて
伝髪の毛てもさらふ濡まむ
扇屋を云ね通人中の妻人を
髪をも何紙の仕者で中編
連理の樹の捨遺別伝
比翼鶯ふ愛〜く泣せり


摂州
小西
摂津
摂ぶ
さんぶ
摂州
西宮
摂イハラ
摂津

故人都松玄湯が門内の中ゝもとり別て
美四ーうゝ青じあさく先好をわゝもて
てぐまのうゝどろうんさいうちーぐん
多孫若尚的一家秋空法紫文が
彩文今の帯を
解る
ふ
ね
俗名人と
ちまちふ見うゝ色

春色連理梅巻之四

江戸　梅暮里谷峩作

第七齣

百穀や。古き御製ふあゝ祢ども。草なゝぬ
身も忍べだや。彩ふ製ふ
遊き。灯うげ蒔絵外の視を。ん祀ひきあふまと
まさく。掘つふ彩る両個連。通りもどりの一個の
如ふ。嗅うけゝもて悔しあぐゝ。洗も彩さゝ洗

暫時ハ二人ハ互に遠慮しあひて 房「ヲヤお豊か とよ「ハイ
若旦那さま私もモウくどんなに気をもみましたらう 房「何故それが何処へ行のだ とよ「浅草
へお迎に参りましたのでおざいますョ大かたお菊さんと
今のお宅でござらうとぞんじまして 房「己ハ急用が出来
たのう とよ「急用の何のといふ処でもござりません
先刻から御新家の旦那さまがお入ッて米君の
お身のうへの事がいろく母上に聖ら仰ッて
何でも今が今親父が承知しても房をよびよせ房の身の意見も
聞と随分くで勘当なりと申込ありして今夜
中に埒を明ねバならぬと立腹きッて在
まだのんきから御隠居さまへモウくおじく遊し
て在ましたト
君がさまどうぞ房二郎もかくぞのうへハいのちの
また今さらふとのあんど おきくもそもふ納とせ
お豊のまへもきのどくらしくくでおぼらしく涙ぐんでもつまんぐ
ふ後先のまけふ今らしく絡ども今ひ男が前のうへの一大ことに
ぞと思ひやる絡のあんド 房「熟ぞそやアなア妻ぞんおまへく
をあまドうるべし
を渡方 林家の主人をのふら心付をむらお雪が父あり

のゝ「イヽヱ左様でございますせんぐ者ぞおきく
さんの宅へ皆ぶ承知で居ますから国元
きゝ合ハ居付本家のこと代屋うまさアノ意地
悪ばんこうもハ でも捜ハ系りておきくさんのうちで
そ居を形通てだくん様だせそれハモウ形そ居の
おくさめハ貴ございますせうとぞんじますから一寸
隠で出張居さゝハ所ゝ様中ゝよて表四のお近ぶ
家りまんぶ名ハ私ぶ出ん

のでございますんヨざうゝそ居て
様ぶ居ますん貴ぶ貴ぶ一寸お伺う
ます 假令出動ハお体様をうハ抑近ハおまり
様されて通ぶ外ゝ出様様をてぶお来ありさゝ
あいかうハお家様しても婚様さうぶ又どうゝ
そ様ぶ様ぶ人のお意ひかうハいうますせんゝト
ひとん物ハおきくぶ「アノ房さんお内の傍 家てどや
おきくたうまして
ア母上ぶさそ出ん紀をら様てらあいぶうゝ

愛うゝまでぐゝあの方こは連立ふお出あきこいな
私もいっしょの遠まで送りて来うゝ先達ら来
なゝ○ろ房さんトやさしくこゑをかけめのうはを
ゝくゝぐんくゝふ製藤あくゝ。家もこがゝ容貌ふ
猫のあんどの形て。鶏を食るいゝらさ。安あゝ
も恐くと。霧時ぐんくれて元祐さうおゝを風と
んびき「アノ若旦那おきゝ女工君がおきくさんで
ちがいませんくゝ房「ムトちがる「ヤア元祐さん

でございますろ私ゝゝ旦那さ女の幼ゝちうゝ
お嬢ふ居ましゝ出ゝゝゝりのでおざいません
遠井ゝゝゝ中ゝ接拶もいゝませんで
ヤア失礼あト「まゝゝてア
とんざて成ゝさうゝてを失礼ふヤシまけを
数のでおざいましゝモうゝく面目もございません
ゝ旦那さんのゝゝ意皆私の恥のそでございます
うゝお願も立ませうぶ何事慇懃やそらいます

「ナヤまりくちんでおぎろのまをうる。アノモウ直濕
居さんも不郎おまくさんのお婦だろう拵げて
どうろ赤濕もあるべ家さいりのどが家理など
つくひりのとまいこらあ濕でおんで拵して
そろうお在らまくしょそれふモウ我濕一ッぞふ
おけ長拵げさ彩旦形さんだらるる在ましうく
さぞお周りらまくまをうげてヲ何年歳年も
[illegible]

あまくそれどやア愛ら他人も通くく察刷町く
ろ二 濕ふまくふ嘉あナ拵して二人でうくお濕を
して家く濕くく「ア、拵らまくヨ私もお周ふ藏ら
てて葉ごうくお濕ヤシて逆さいてもあるし
モウ変うくハ来くもありまをんうくおから来て
らごさいる「ハイありがうくうございまたがト
房「そをてらを愛変ろ「ナニ拵いくしても宜で
ごいまんぐ第一正硬のおむろひがおきくさんの

お蔦へ案じて居ますとの事
私がおたのみ申した事は
能くしてくだされましたか
房「ムヽそれも能く
ノ「ナニ房さんそれハ子細とは彩でをいて私
達ハ二階でお噂を致さうぢやおざいませんか
房「ア、然サ二ツのどうしてもとかの
つけて家へ渡あいと致ませ何を義理ぢあるを
あいうノうお考それじゃアおまへ意も角も
連れまして来て
ノ「いえ
案じませう考へ合りおてまづ私ハ
でございまして
房「あのそれハ
彩といふあぢんをきてうぢうホイそれをいつ
ヲけおもいろあいなを
房「ア
ノ「ア
房「ハ
ましく云出されてもこの
文孫の智恵とかヲ
つきませう
房「能く
ノ「ハイモウ彩うち

さうしておまへさんひとりを杖とも柱ともたのしみに思つて居ますのに何卒宜敷お頼申ますへ」ゑゝくどういひなさんな私がそれをきいて邪とすべことはありませんが元来是ほど和合人の製せらるゝ縁ある人が出ましても其を及もなさる私が蔭に為り陽に為りいたしておまへりのお気のやすまるやうにいたしませんりくけしておかんしん[illegible]

実に何卒「サア来ましたとも早く遊んでおくれ」と寛ぎすトニ人連だち奥へ入く。露紀花こゝろもありうて。従来の他視羞愧ていまだ纏ぞお互見とがめられぬと思ふ木ア。通るこつ世の中ぞ郭までも廣き廣小路も。思へば狭き足りとの河岸に渡く房三郎をいくつもむすめと婢女の丈夫にまよりひ。両國橋の長き橋も。みじかくおりに女丈夫。よし川町もちか越く。ひとこち君を

おとよ
おきく
勘八
庄一郎

町境より一本まで柳橋を吹風深川又十
疋の。家根瓦も白眼鬼瓦のひかりも凄き思ひ
に。軒下つゞき折曲る。横町の出会がしら。夜目も
遠さぬ猫の眼鷹の眼。文配人の動八が。弓張
提灯見出して動「ヤ若旦那」房「エ、トびつくりおも
はずも向ふに若衆く。おとなひおもひがけざりしを
あきれ果て霎時は身も動顛おもしでそろり。
さて此娘の口八丁に先だち…動
理屈をのべて情訓も房二郎を連ゆ
ゆくも果敢なく引裂きて。深合なく
其の葉も。なきの洞の別れに。本方の意情。
独り思ふも思ひがん痛。彼是のことが年弘
悲しく記さずことゞく。理論に厭ておりし
うらぶれ。哀れ鋭しかの童男女児の心を恐れく
其條を省ぬ。好悩に至て自然。情義を
有知らぬ人の辛き観めせども実に読文一勝を。

小一丁ほど場所から作者が手まへの湯屋にて。
格子作が懐淋なるべし

第八齣

村雨晴の稲むらも彼の天照同の勧年なり
などど後炮の火を上がれし。掃除してある流し板へ。
あらら流下僕二人「まアまア風呂のあがり湯で
この桶をかゝさんがみんなつけさんてさ。おまへ
なさけないこつた上でも居ねへ

戸をあけてのぞく下女「モウ沸さく〳〵 下男「よいとく〳〵せ 女「あん
ぐら〳〵ふざけて熱ヨ宜ア湯サヲあげるから 下男「
ふざけやアな後ゝ宜とつかまへ 下女「これしやア
お連サンスヨそれから子孫でゝ湯を入て逐てお呉ヨ
下男「ヲイきさま嬌気ざト 手ぬぐひ口から頭て流て帰るとちうしてきた
下女「アゝお松どん又お風呂が宜しうござりますと
松「ハイ直にお連申しても宜く 下女「ハイ漆淨と
しておざいます 松「先程からお旦那さん

おめ〳〵捉ゑ　房「父上も母上もモウ御ごのろ」　松「イヽヱ爺さんのお風邪をコロてらゐ在ましたらう今日の
おめ〳〵捉ゑませんかゝの君とお孃さんだうりで
おぐのまん　房「ヲヤ然ろそれでもお言おまへ
お這入ナ　雪「イヱ私ゝお稼でなりましたらう
君ゝアおめ〳〵捉ゑ　房「然ろそれでもや彩湯
這入ろう　松「お孃さんとお稼でおうをしう
おぐのまんが彼方の小姐ゝ君い好でらゐ在
ませうト房二部をおろうと見て寛ゆつくり房
二部も若ゝうひ悦惚のお言ゝさゝ小分ら　雪「
ヲヤ私ゝ何ぞお對のぐ　松「十二お湯ぐ弄ぐ
君の容ごとヤシまん　雪「ヲホゝいやお　松
ざれく　松「ヲホゝサア第風呂形さんらゐ入ましアノ
お孃さんも法芸ゝお石捉ゑせ　雪「私もうく
下刺ゑ　松「十二丁笑ゝ

で、お湯を取ふ酒ふ何とかしてまいれとのゝ
ゝまをさいらしやるでせうや湯ざうもゝ
アレ米ア君がゝ世話を焼らるゝお嬢さまゝ
庄屋さまだうも拵ばしてらゐた在まいてるぞうも義旦
那さまハ拵がお出ヨ彼方へらゐ入ッちやア結で〳〵
おぐさいまいけまどもトゝ同服屋こと掛ひのお松
あまをべお者が悦惚のだまッさきさま集祭りての
嬢さまハ上田屋さまあをべこと法華ふお流行
だせヨ○サアお夜更拵ゞせー活うをお松てう〳〵
興をべ處女ふたろうしく丼日以来同河房藤紀を
芸ふーあがゝもまざうちゝ義ね男衆を思ひまふ
せべうゝめしく文裏しくも舞うゝ筆をとうあふを
お松がまうゝひ男のん涙うゝて落ぐるお由紀を
妻理ゆりふ房二郎と法華ふ湯どのゝつま涙ね「サア
お湯も置ふ減でおぐさいまいトゝ湯くれを「

アノ小団扇さまのお縫を是でござりますヨト

松「お嬢さまのお背をこすりまして、お流し申しまして

それからお傍で小団扇さまのお背をお嬢さまへ

お流し申しあげませうヨ小団扇さまエお嬢さまにお流

し申しあげませうておかはりにひ遊ばせトいひながらお雪の背中を流してしまふ　松「アノ

まあさつしておへやへお茶の土瓶をうけて来ませう

もう一寸ひとりで気がつきましたヨ　雪「ヲヤおまへ寝て居るか

あゝいゝのう　松「いかいお世話でござりますへ　雪「

まかつて　松「ちと遠慮申しますヨ。ヲヤおさむうございますく

房「

膝ましく子　一段声を張りあげて　お湯がのくなるをうけてお是ヨ

ト二度うけまかつてアを立て出てくるさしむけさがひふ

えぞうの者のまるさ房二郎も風呂の縁よりいで、

サア寒くなりましたお遠入ヨ私もモウそろく

あがりませう　雪「ヲヤ左様なら、おせなかをあがし

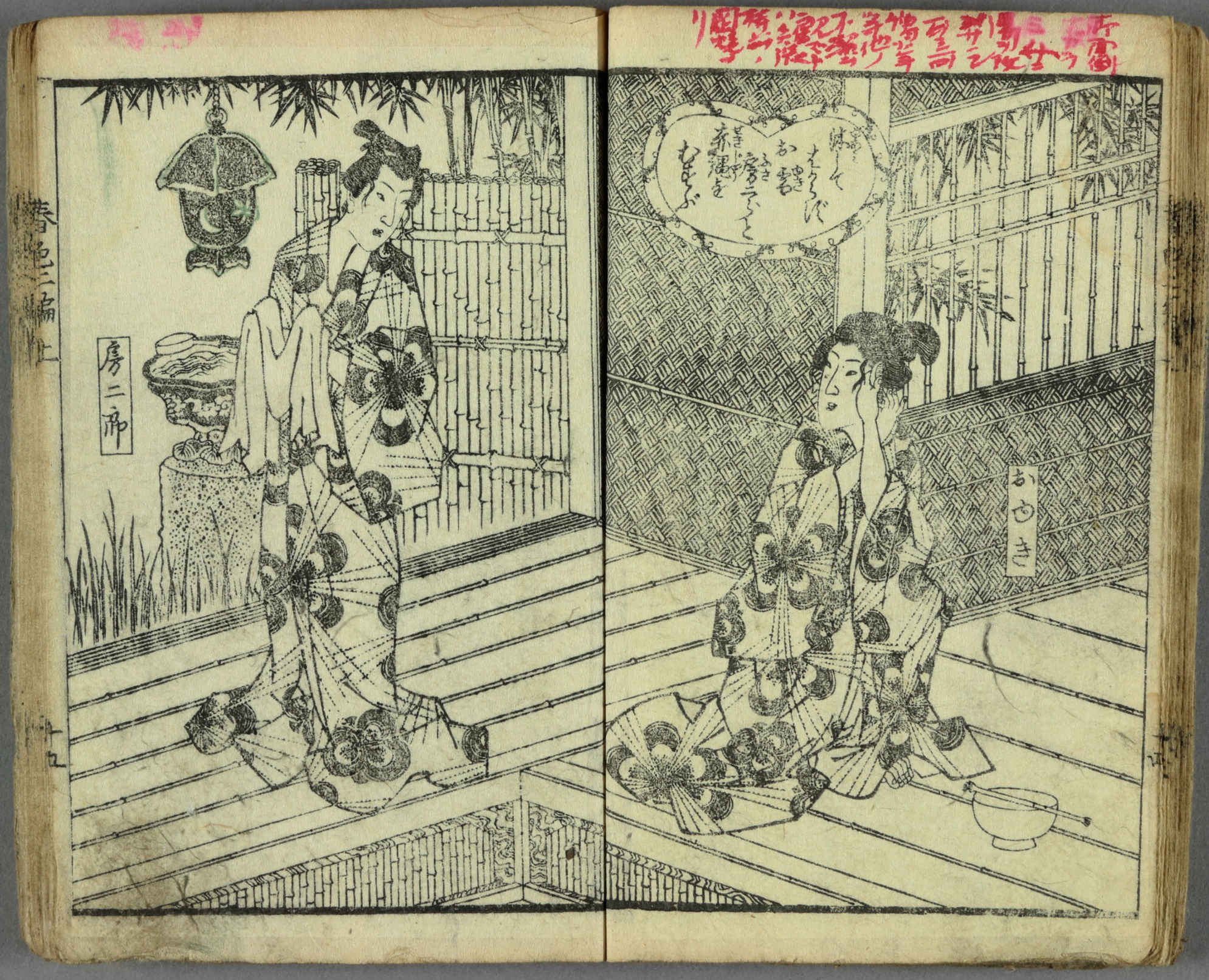
ませう　房「ナニまア宜うございますお先へお遠入ヨ

風邪をひくと悪うございます　雪「ハイ左様ならそこし

お待遊ばせアノお縫も濯しておござりますヨ　房「

これ髪ごとヲヤ髪ヲ何ごろ屋んざいろもあり所何
ゝゝらト いひなゞつろてゐる。おゆきハ湯の中を
房三郎のうしろくまくり素くゝ飛ばさゝふそぐうしさりふ
のだゝてせるうをあらふ髪世弓あるゝのまてくむまあゝびをさ男を
ひろ思ふさゝむひのたごろあれがまごゐもたごへぬゝくとこを
ゐもつけべきことあれども世界のうちとりひ見その水を鼻下
をるこゝろもくあり髪ぞむをものよ情あゝくまべて女の男ふを
しゞゝうゝハこゝしせふきゆんこいゝゝ嬢ごゝちおきのごゝ彩もあゝて
當下二月の中旬もゐこゝ御ゐるむ。寒さも風景ふ
ゝゝ雪の。孔濁る模色。見えてゝゝふ世の中
ゐ。れ

義のあゝろの底井。をこゝ世もゐてゝゝ彩ゝの
きゝを云ばえふ。岩根の玉のこゐふぞふ。滝一ゑの源こ
なもいこ雪。凝重雲あゝで。蓋。霧ふ嶺ね猫のうち。
男も赤ゝ白ふあゝ絵ごゝも。まゞご年闌ね一向の凝
世。お藁ふ義理を立秋の。紅葉ぶゝろの羅汁の。
いこ掌濁ゝ下猫。あゞれつこゝ蓋味ゐゝきぶも
ゝゝ猫をうちひろげて。ゝろゝ書のべあ互ふぴゝゝろ
と狐ゝこゝご。髪いとゝり向き見ゝゝ新。ゐの森ふ


房二郎
おかや

ありて癖向お雪ぐらしいと替り気の好よ
そぐくへ遠時に捨て置きねころまありて　房「
お雪やモウ置ヨ寒く、お昧ぐらそうにまくおまへの
ト肩さきとまで　ヲヤく冷く成ッてト　湯で身体あり一湯を氷ぬるのにまめしく
くけてかれどお雪ハぞつと　雪
まるほどうれしく　「ハイありがたうござります居てア
お座入らっ樂な　房「そんなら猪牙にまゐらう　雪「
ハイ　ト　うれしさうに男の顔を見てふかもり　雪「兄さん　房「エ　雪「お菊
ぎん[illegible]
「フンお菊さんとの色で稽古女を支へてまゐいよ
しうけんの[illegible]つひしあるべし
ト　風呂の戸　雪「ヲヤ　ト　おもわくける是けんどんに[illegible]　新うくらへちゅる
[illegible]其一ッ[illegible]のやきもちく
喧てむ夏想窓へ風がのりて来る音のこゝ味せん。
唄古しき篠夏雨も。本調子と二上りの爪弾あぶら
らんち合せ。好に由らしき京の調。
「ちるよみの[illegible]
梅が香の花に[illegible]
一トまぢの樹さてやる氣のひと[illegible]

ゆ〜こと梅やゞて家まで来まるものゝサ
常高梅どやアるのうるのサッサあんとものい
ふいるゞ

房「あの子吾「ハイ房「常高梅ふあるふ後へ吾「ヨト
金りうを〜さふぶる〜と震て居を風呂の中
〜〜を出して房「サア お遠入ヨト お器の水を
湯の中あれば何あるる猪ふ来る亥の刻に
八時も寝て房「きの年せ

後へ吾「ヱ、何故ヱ房「年まで行のヨト互ふ
ぬれさ郷と郷ひるる者る。此時後地の火ゞ四く
蔵て チウ引 吾「アレ 松がまのりまんヨ房「ヨト
外へ家を出ぶる。樋行の時ふ
ゑの蔵て言ドウ〜〜

春色連理梅巻之四畢

江戸　梅暮里谷峩作

第九齣

大義の利益著明。彼淺房ある沛翁舘より。
沛翁舘河岸へ出たゞまふ。慢文と記したる。扁額飾し
華表あり。後門廣き中ふ。成田不動明王の。猿宿の
沛仮堂まゝまゝせば。引もきゝざる参詣の。群集が沖ふ
一個のむすめ。百姿のさゝを。額ふ掛て。百きつねどりつ

化粧もふ〳〵で衿をかく〳〵に一ぢん不乱やげん百姿も異
しうバ堂下ふ又も踏躍一日も早く世の中へ出て
文婦の縁の糸結ばせかく〳〵とくり〳〵にの中ふ
てダごまふあれがんも糸ぼ家路へもどる浮よう
男「ヲイ〳〵お菊さんト大きな声でよび止うき
ふりくるまんてき〳〵「ヲヤ支配人さんどち〳〵
番頭「イヤサ宜所で逢つさおめくの宅へ伺云
八「

家でおさうイヤ去う長待ごまま迷へ濡ても宜
敷く「然でおざいますく〳〵後振り〳〵「何
方と云りてお菊ふいつぶ伺云を己ふ新むものゞ
絶ふあるりの己郎の内員形ヨきく「ヲヤ左様で
おさいますく〳〵ト第二席ゞ然でも何やゞ
ませうれく宅へくらべ「左様「
お菊の宅へ切ても宜ゞ毋人ふ伺ゞて勇び
てくがあるく〳〵ト「ムヽあまとふ去年くまる

ちょくせつ一寸清葉ふ来て迎へ荒屋町
まづりてそり付の船屋へ送入がうをてゐどこと
ゐくく女「ヲヤ旦那らゐ入ましサア お二階へ
ゐ「アイちょと内客を連て来さう 腰掛「ヘイ左様
あく奥へお連申しる 女「ハイ 世方へト 軒屋の
うけとるれらうぎきの酒を ゐ「今日ちちと小事のも
又興ぎらふぎきふつれゐ
ゐく長ゐ 女「ヘイかしてまりましとトりで ゐ「
ゐ

仕きうをとれくうく「ハイ有がとうおざいます 言
まうと母が案じましたらう 行平出用をち少せ
るきう ら来てらいゐ早く帰りこうおざいまんう ゐ「マア
宜ゐ事逢くありやヲ宅まで送って参る。十一カ出前
の家ら母人と女人渡世ろき「ハイ ゐ「左様
何知ゐ釈教うでもおくら勝力長る人がゐる
ゐ「イエ外ゐ釈ゐも何り在ませんうう実ゐ
こうろ独りおざいまして ゐ「左様ゐ左様ヤヲ

全くあちらへの縁限で渡世して居るのゝ暮しそれも
昔堂ゝ[illegible]為ふ減る義さへでもそれゝ
宜ふ且形もまゝ[illegible]小金で[illegible]の
小金ふも[illegible]られゝ[illegible]渡世のさそく
ふゝ繁昌ホト繁ゝで房二帝と色ふ[illegible]
ふきまう「イ清ん[illegible]ふ[illegible]
ゝゝ此稼しい乎ゝでもふうませんゝ[illegible]
丹屋[illegible]

世を渡ゝゝ[illegible]ん[illegible]ゝゝ房さん
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ふ仕事の
何のゝ[illegible]さりいけんか私ふおいてゝ
[illegible]ふ[illegible]ゝ此ふもお義さんが房さんを
お迎ふお出のアノ義ゝゝ房さんも[illegible]
り一番一動尚でもおさまるゝ私の方へ
引取て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

てもいっせつとしをくるしゃ世ろの義理あいで
をの妻を退く現ホ家ろくそ又余所ホ妻を
うつをこれたくこきありませんろ藤義
くとを私の中うあンでありませうョト
あれがらくどっくりとくるあるべし是既あるものまでしてちくの
源ろいあるうらくあはよりきれば
原あのこしおきくホあるれど女の祝を
あるばうまば自然と世ホまをくめく女ホあきこくとものホあるべし
事ハこ然でもあらよが扇ホこどノそをどやア
ぜき「ハイどうで扇屋ホはまの私ざうのまひ
人が亡られば寧ろうさく世りて宜ぐまた
ア「フ、強義ホおこどの為ざ考ア獨身
ホ我慢一ッたのホまるも宜ど母人も在りて見
ア早ア昇老人を安んさせるど宜ドや義ろ
人を孝行ど勇一ざせこのうち居もりで ア「サア
もう一猪に欲張へ「奥ホ私ア嫁ひホんぐ
ありまばうモう堪忍して「そをでも一猪口

限でもさきしまりがありいへト おりおつので きりなげら それでも房さんと

なんとかくも飲まさうとふきく「そりやアおらが俗

ないでもあまてこそ平らまししいらう酒られて

飲ない酒も少しも飲まないのサ丹様てへ

こりやどうでもお前さんお親さらわさと云を

早くお見せなさんなねへ 動「丹様の急迫を

と宜ナ実もと云伝も何も承へのサ きく「ヲヤ

それしでかわいがんに情 ……

ありませんく 動「左様ヨヲ八、 おきくさん さしさあまバれしを

おもしども今さら きく「あんまり子用も無用な庵とゝしい

ふせんりさたなく 母上がぜんるふおんじて房さんにも忘れいおゝせん

そまとドやア私も娘ませ 動「ヲツト待ねへお前も

用が無ッても己が用があるテ外でも無へがお前

房さんの様なものゝ不縁て房さん所が娘つま

らねへものドヤア揃くろ世界も何でも金のこと

ざス此頃も其通り本人を承知させるが肝一

進奉納

方梅彦

愛敬を爲さんとおきく祈願を爲る

おきく八

のこゝろをお前せく兼知もアやアく丸金ち義太
でも出して来ゝ何知ら傷所の宜町のうり家を
覗て毎人とお前ふも解ずうる何でる思ち黄を
ちゝ有て小僧と婢女の夫人も亦ゝく極小体ホ
廓で著ゝていゝゝ宜どやアねくらあんとまんぎゝ
悪義味でもあるめへト　しさぶろあれと金りホむゝくいひまる
ゝバ三分二帝の才のうゝホきまるこゝのあり
すやせんとおりゝぐきのこハつきもまるた

「いろゝ虫ん切ホあり

ゝの雲へ家をる拵ることがありまして也房さんを
拵ることゝ出来ませんゝゝアお野や　こまさせう私も
モうゝ家が迫まゝうゝ出ゝ方拵あゝト
丘を引あ
「お前も宜加減ホ扁屋をゝ極金り
もうゝ稼くも拵ぶ有ゝア是拵ますモホ寝をゝをを
孫ふゝとゞあるものゝう痩龍の小僧子よりやア
又格別拵でゞ有るぜト　こゝろだし拵しめらをおきくハ
一生懸命丁寧をゝんとゝ　もまやせんゝとあゝく飯をゝんても
あり人ところ陰ふのゝ
「おきくさんゝは方ゝく

うんハちをひっくりかへる拵の
ちっくきくられしくふりわど
しくハくるをおきくどてろあいの友ぢちあて
をでは初でんかうきのあるげいしやのおしき
大変ごヨ お前の奥上ぢ急ぐ病ぢ農いて長患ぢ
大騒ごヨモワ九死一生宮ぢうう早くお伺りア
金剛トおをさまる

「ヲヤ 九拍くてアどう去てよう
祝くトぐむ

「何でもてア私と婚礼ふお出サア。
ヲヤ 君くお死ん寛とト

「アっおきてさん
急も
せて

八

いと

「あんぢくトふ

「却ぢ」の病気の君多

嫁ごヨ私も出切ふ被章ふ在さのごいる使しく
知ぢ所くいるうあまくの声ぢまるうう遠霞をしくう
大さう風くくお在の客ぢうう喉半てよくのごヨきて
ヲヤ 実正ふ強くてア嬉しのれく私ちてワ嬉しくッて
くぢうあまうと思うくヨまとこいかう疑あまいう子
房さんの都のち文死人ぢハる。

「ヲヤ 被如かく
寿蔵ふ奴ぢう翌日寛くう待ってを

九

かう「ヲヤ誰だへ「アヽ、「岩さん
ゝ瞻ぎ見ト脊をぴッしやり「どんと此手を「
有がたうトよりそひゆく

第十齣

あさ緑、糸よりかけて白露を、玉にもぬける春
の柳のあやなき色まで柳橋を渡りて来て同朋町へまがり行く
江戸勤の武家に附添て来る一個の男、目ハ
廿二三の左右、側柳として色あさ黒く、年こそ更へ、紬
縞の羽織、唐桟の袷、琥珀の博多の帯、小紋の
博多縮緬の下着二枚を着こそ、ゆたかなるの
八丈に、藍微塵の縮緬の細帯、縮緬の羽織の紐
絹の帯、古渡りの紙入、嚢物の金具まで、絹
縮緬の風俗、紅藍の段織の帯の端、唐桟の尾久
脇差の鞘、その他の持物、目利きの者が見て
どもの大体を察しぬべく、門前の町の雪駄を穿く

チヤラト引ぎりて駕籠の中を覗き　男「モウまあら
さらふかごの中へ」　女「ハイまことにもう有がとうおざいます
アノ出格子へ都こそ　ス礼ぞ掛ておざいます
男「ムヽ結ろコウ駕籠の底へ坐ておろして
提灯でくれて異あすかごや「ヘイかしこまります
こそをおろしてちんさたろしかごや「員形屋へ何ざろ
ぜひはんさきまでうろくれまるき
礼ぞあり　男「結ろどりく行ざ　ムヽト
[illegible]

やア先刻よりめのあをあつ子ぞ後ゝ祝ゝ
ゝゝるが一ア祝しろ家の前へおろさう　うどや「ハイ
合棒ソレ　合「ヲイきさト　うどを家の
前でおぜくをろく　男「まだ寝ぐがありて在ぐ縫をりつて
居ぐどうふようとしねへ　女「ハイ縫つまる嫁ぐ入遠て
祝りまをもうもあれませんと存じてお藤へ部ゝ家り
まゝうろ私ぐ結ヤて取ませうト　うどうか　男「結ろさん
るう藤へ云て遠を貰へおまへうとてアさうして

在らせちゃるけ鬱を勧うさ稼くら宜女「イエ
有がうちぐいまいちうげさ及でもうたきふ寝ぐ
うくが成まっさ男「イヤてアさうして在らせと
うきたうふり孫をあけてうどうくく病人をいざせるもふまり
の女房はおどろきちぐくくいて来て徹底まりうるとくれば焼を
つけふちんをしも肩をくくいとりてきて寝さと気をいぐ
うごやまもあいさうぬうくばいくちんせうふせるるうちうどやの後
をとこち男「イヤモウ私もたきまあんじさぐ今体悪ぎ
あくのる
ぐえて格別あることが無ってやあんしまっさ女房「
まってもうかはとうに算はしかあるうちあ家さぐと気をいぐ
くくが君くくはてアお別降も気のぐさうでどざいまもれく
男「エあんの通りぐくさぐ老女ごちあくくつんまって
てもとけれくくく抱して来まっさ男「家ふ長屋
てでまぐいまくさ後く全くうしてアぐういくる遠くく
農さてでざいまはエ男「私も根えくくはちくれ
が何でも嬬変が解活宜のう悪云をつのさりんぐ
くくく待が立後て援さ男さ力が光とアくあまく
ちはる若町の家戸隙ぐらくく地東の人が皆ワッ少く

一列不逸出しこそづこそ不実情されさこつあとこそ彼
彼を江戸動不居ましこと繰動が御ごあとで井戸の
陰ふ女が例まして居るこいつらこんると若んて在宮子
ざうこ出ろこの者ふ江戸動へ早ぎまのませていろこく
仆抱して笑さこ愛のりので娘ゲ動さ及へ系詰ふ
いろこが逢いこ出迎ふ来ざこつあこざここそん
あこモウ彼是娘も向こらあこりて出ふ解へ
なて連ゲ

女房

さうるりのさ移く毎人髪おきくの毎ありふとんのうくふ
ねろされまあれどもりこく
こいこ恵気あわこねびりたや毎「ア、こうこ」こんざこ術日
こうこうきゆうまそたこう
此指ふ逢いここ無ざれく「ゆんじやアあいろ楽中
で知己ふでも逢て何樽で寄られてでもお在のじやア
あいろ毎「それも去れるいろ逢くあるこ私ざあんじこ
こ思こくいろも若あいでハ何所へもいあのおサ女房「

同様の人に隠れて
北男
いまだ名を知らず
来澤
おきく

笑る実ろ〳〵鈴ごらよ梅く方私して戸ろと此梅ふ逢
のん形ふ〳〵ぢゃ〳〵ちゃいろト嘆のところあろごく
捨てすをあける復のおきく「毎上さごあんじてお在ご
らゆおく私ちもうとのふ梅〳〵いてこが方てるト上を上をあけてこれの
んまれあつろきおことこるりのろこきんとをるをしてかろてば
ふ毎ちやこと書てのるいやぞふしんあがうろくあろうろのおことふ
ふしやして姫ぐきく「ヲヤ毎上ごろうらまご毎「私ろうおまく
まるるりふ驚
ニアごろうして此信ふ逢ろのごエ私も夫厄難ふ逢こと
ヨト こまろ〳〵むろんふでろろ逢中もをくろ〳〵ゆをとあごお著

「お師匠さんお家ちろ〳〵ろ〳〵まろ〳〵こがふ
きく「ハイ有がろう今出〳〵まろヨト ふろろとろ〳〵ろ〳〵をいごろの男ふまをるありてごいごと
ちきく「ちょうのと藤のおそさん女ろう「アイト あろう耳こまろをして女ろう裏
き
にろう梅川きく「アノ先君上清お家ちごちろうぞんじません
いそ〳〵
ろ何事是を庄孫ふ此指茅ふ今〳〵も是ろ〳〵ちと
いろ〳〵ろ入ろごさるまろ〳〵ナ男「イエ私ちちと堂ろごご
ろ
ろ〳〵家てもよけをバ毎日でも来まて然して
アノ庄入門をして鬱古をしてお貰ひかさうヨきく「

ヲホヽヽ感心らるゝ時ヨ　時ヽまゝ私の母うるゝ
三味線を弾して俗りあゝ男ひとら来も可笑りて
冥おぢいまゝのサ　男「とんぢゝとこゝろも
不気用ざうゝどうでむぢゝと思ひて一向世界へ入
ぬ家あゝことも有いうゝ老入の学文ふたゝめて
ぶんをうゝも男ふのサ有うゝ毎月鬱たふ来るのをとんる
活弟でもおうゝる筆でも有ふ男八見て立猿までもとる
人があるやアしまいらまゝ

さく「ヲヤまアあんなあらひて成らる俗ヨウ有ゝゝ
私のやうな二本ふ兵衛好き事ゝあることが有ますりのろ
ぶんを有て成あんゝら来おとゝろをさるく何の事
いつゝしらるゝ入てらゝ　男「イヒゝゝぢうもあんしんるのゝれく
彩りふるもけんのんざるゝゝドラ　お大事ふら来
ヨまゝこ此るふあゝぢゝしさう毎人ゝどうぢく
此ゝ方ゝるゝト　たゝまで図と　さく「イヽヨ　親子とも不好風で
のむこゝぶの
モウいけませんハヲホヽ　男「アゝ然くそゝでゝ

今行ぞ無人のにて合さうあるものをだんさて家を
さうと立を引きく　ヲヤまア是は君冥加なこのまたハ子
内を家方でもまぐ様刎ものを拾まくと汁りでござい
まいたらうかうかくらゐ在てられ　さる男「立ある
ぐさうぐさいまたがしう又他へ寄ゆりまたらう
さく「それをモウ渡方此方へおらをんせてあをら来
知がさぐありませうぐさうゐふらあく汚をぐ〳〵さく
ちをあらかしても宜ぐ〳〵アあるまたんさうとやうス後

ちゝうぐさのまたを祝くあく〳〵　男「アハ〳〵ぐく大きふさの
りくふ物何延へ引くも掛ぐさをるやつヲアく金りり
踊をあくうちありませうヨそれふ又遠人の例ふサウ
何時まを在も家ぐ利祝くく　母「モウ大きふ喰ゝうぐさい
ままとうう私ふをけて古ん祝あさ〳〵ちのぐるゐ在くぐ
さのまゝトくうを考て　男「アイ市気人ら来ト刎あり
さうふへ寄うん人を隠ふ鍋ふ遠　只て渡りくう
ゝこらのの男らぞいとく立て聞く這入ぞトく

[illegible]て[illegible]なくてもば離ぶれども。便[illegible]
[illegible]ことなるべし。卑[illegible]運[illegible]個の男[illegible]
人うれ[illegible]人。お菓[illegible]吉凶[illegible]
[illegible]で分解を。[illegible]あ[illegible]せ[illegible]

春色連理梅巻之五畢

春色連理梅巻之六

江戸　春亭梅暮里谷峩作

第十一齣

人や来し柳[illegible]の窓外[illegible]
せんと。[illegible]の[illegible]。[illegible]の[illegible]の
[illegible]を[illegible]。[illegible][illegible]
[illegible]とのぞ[illegible]。[illegible]を[illegible]

此程毎度うちたぐきかき
夏のこゝろ入りまず猫をいとあ
くらのそぐみとも思へてもいと遠き義
きをいとしくてこの四月と云の空
しさあるこゝろ罪深しとも業
とうまゝいと夏のあるまゝにすす
ぶもものうまゝ頃ものまゝ
夏〳〵九十こゝろの猫とゆ中
むまゝくゝひのこゝろを
人うけ金まゝ猫ふきこゝろ
猫もむやらやこゝろ
その猫を引きまゝ
猫あるこゝろ分猫のうつぐ
しこゝろすぐこゝろ人

もうきの毒そこのうつくしき弓張を
らのぞきて出へ今宵の仇の姫
けりのぐるやとい掛くるを直
和三郎のりけれるを知ると
言無頼こまつ人ぶし法とけ
りあとそこのぐ月をうけてまぶる
しのぶの月影

そこの所さ泥くあくたるの
所積ぶとう道とくまく
きの漆を一歩けん命
の岩付し歯ぎしつの
きてふ耶めくを
あ物さくとう中姫の兵ふ
只笑ふ所のこの者

い梅よ朝までも事も御ざく私
不便なる思召のふかき女の一念
まよふて頼しれまでも銭か
はかなくなりしこの朝木
すこし　ある

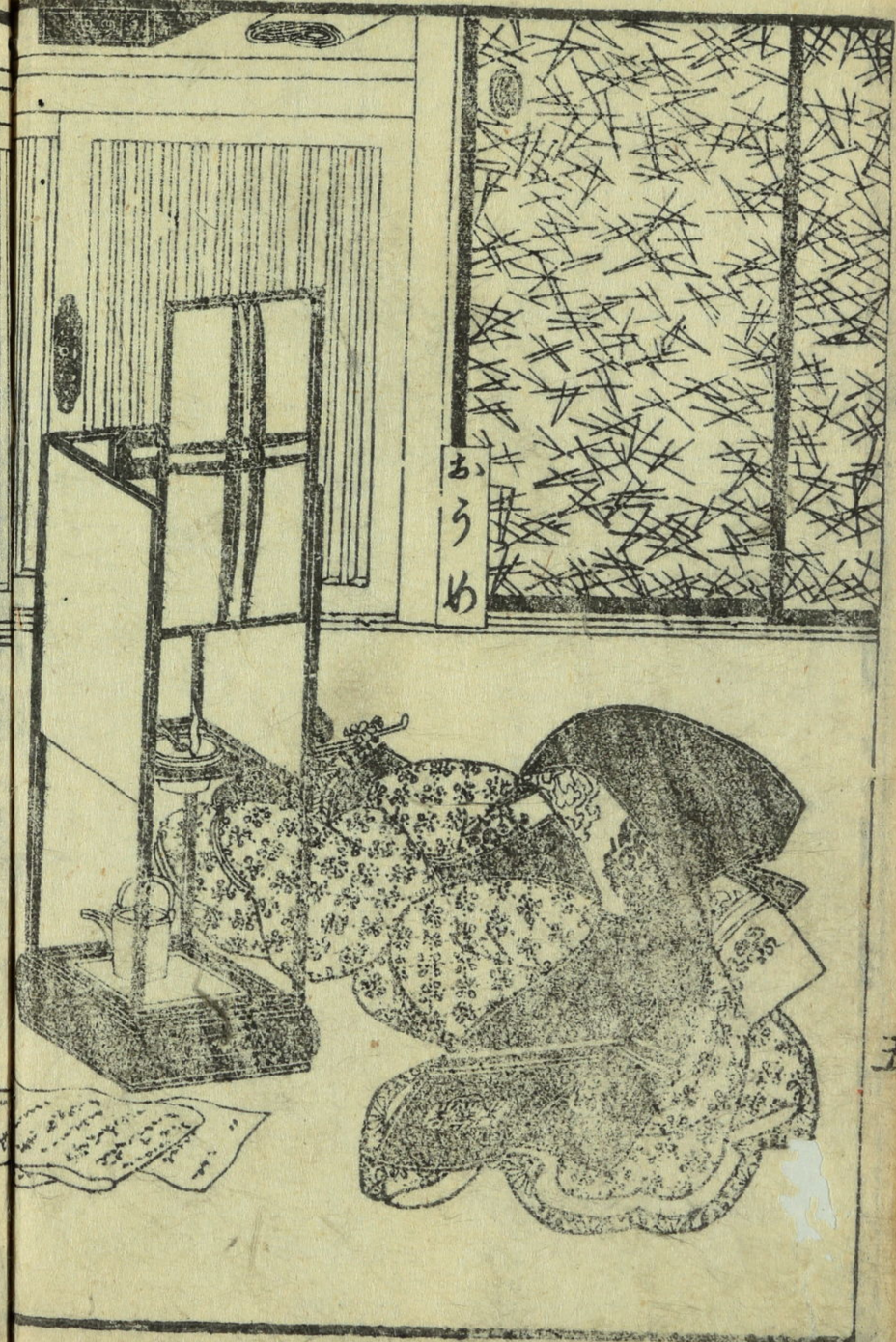
梅「ヲヤヽ是まで着通形と先から二世かけて文

ござへアがらして私の手銭爰に見んで然ますで御
さらうお㒵を見てしいアノ源氏の阿古木の三筋で
口のうちにていとも懐しき姿の宿の行灯と引く
御気ぶらに。気味悪くも稀まで迄は濃も
果さて彼文を巻をたまく吐息つくらしが。
の障子にさしてくしく何か隠れし物音に悕し
つかり向ば障子をそつと引明て「お梅さんといふ
声もいと哀気なるに咲かけて長き黒髪ふり乱し。

自殺なんて出来ないのだ。モッとこと言ーあんな女よ。
お梅とキャツと玉清一声。仰反倒を歯をくいしめ
ヲイ〳〵お梅さん〳〵ト力をこめ息絶る。「お梅さん
抱び。髪をあいて掛物の紐ふ。涙ながらに抱起し
ふく〳〵。抱起し清〳〵長く嘆息「お梅さん」
ト耳のもとへ口〳〵嘆声の。やう〳〵ふ通じて
ウーと長く息。お梅はびっくり。

お梅。眼を細くひらき息の下ふ「アヽ長閑な
胸腔をさまとりあげ〳〵。掛物の方をはうつ〳〵ふ
眼〳〵て瞬を動掛び。グッタリと咽を通つ。膨脹し
お梅。眼を細くひらき息の下ふ「アヽ長閑な
さ夜ろヨトぶく〳〵ふくて「ムヽ已ざョ お梅さん者ワ
うり結ヨ「私ゃアモウ。御くわてくあり
ま〳〵あんざョ「アヽどうく〳〵シざ遊きの行もよ
居やアあ〳〵極くさる「ヨアア今の女を者君も
ぐらんら来のうえ「清ざう已アあアあ

こゝろ
なかに
思ふ
ばかりを
生じて
お梅
いきたてゝ
生霊を
なる
嫉妬の
鬼


お
うめ

ちゃんとサアモウ正氣になるちゃんとしてゐるヨ

「トにあなたを愛うるト」「アヽ嬉しいト」

「私アどうしても世う移く

由「エ」「私の図形さ」

「何を」「お嬶ア」

「何をいつぺ」

「ナニ人ら私の服ハ見えるこの一ヶ

君とお中の聽如中ごうこのことを知て

根ハ来ンであります」由「ハヽ」「る廉をこ移く

「イエ何でも拾りの遺ございます」由「ナニ也

お蔦の知ハ己ら別ハこゝ人りさ如ごありも有れ

「ヲヤ君に拾ってとらあ作けまでも北里の

名妓ト」「あまい美色のてごうゝ面体の就拾

「イヽエ嫌を」「私のてを義ハ人ら

ハナ

ゝあでございまりのラト

「あれども」「いたて拾ふギッうりと」

愛ハ人ゝ。拾ハ孫庭ハ銀色ゝ又今の幽霊ら

ゝレハ人ハ乗て居ゝゼト」「のまの中」

「キヤット」「由ゝ助ハ人ら七り分。今ハ男の拾ゝ

服ゆきまハさ、ほどゞ〳〵くしく戦栗て居るを出し助ら
て笑ゞりて由「こま 困る 病ざくワト ゆうまいをひき ワう
幽灵い正嚴をマ能ん ん ヨト いされてお物いこゝろぐるぐ
あ〳〵髪の女のゝ〳〵ホ白アんぢのゝきれ白彼あさぢ物「ヲヤ〳〵ト 私ホ
ちゝめんの衣ぢきもてくゝる昆ぞめの衣裳ゑれべ
あぢ者けぐ マア 様〳〵いゝ見形ぐ是を百て お髪〳〵
あさんま〳〵さんだ子 由「アハ〳〵一 書 咎〳〵ら〳〵 物「笑い
ごッちゃァあります せんハ子 私ゝモウかし 拂てとがあり ま
てひとりで 陸ホ 業味が あ ん ど 業 ま ま
あります〳〵ゝ〳〵ゝ見ホ髪さされるとゝかし も 家がつき
ませんだゝとョ 然し て マ 此 衣裳ゝ ど ホ 何ゝ 家 の で
ぐざのまゑ 由「ハ〳〵この 衣裳ゝ 此 此 他 家 ホ 祝 る
ぐあり て己の友ぐちが 素 物 ゝ を 新 ま ゝ ホ 分 て 習 ま
ゝと ト ぐ〳〵ひふ 度 し 私 ゝ と し て 変 る 紙 ゝ く ゝ ゝ
ぐゝ〳〵今ゝ 表ぐゝ 衣裳 つ ぐ ら ぐ の 法 乃 ゝ を 運 で
家ゝのぐ 物「ヲヤ〳〵ゝ それハさぞ 楽 し ゝ ら ぐ ぐ ハ
ませう 移 く 悲 乃 ん ゝ ゝ を ゝ ゝ 出 家 ま せ ん ゝ ゝ 移 「 中 」

かんせうこともお前にかんせうかして思って家を継いで参る
のだアナ 梅「ウヽうれしくら内緒ヨ 由「実ヨそうでご
ざります今晩から衣裳の支度をさせてこのごろに眼を
まわして果すとも宜いヨアノし 梅「それでも実に
絆を継ぎましたものヲ第一おまへさま私が辛苦
だうかさる 由「さうさアやア遠くに己も死ぬのヨ 梅「ヲトおかへり
萬直形丑 由「あんまり一統してらいって来てくざ
ますよまし 勘定をよくどうしたおして 由「ヲヤそうかヤア何ぞ
ト手をさすさしてたもとくおしつくせかわりがとうくんでてらそざる
ト座お梅を手をりくふりいどきあげ返せば遊びける芸者が
下女「萬直形さん丑どゐさかのお客さんがお入ますく
らくお逢に参りまする

第十二齣

客の帰りし其後を行灯あげる 下女「ヱヽ今晩八重垣さまと
枕まするの太そうの早くお帰りし桑すて給へ 由「ウン
是から又後園の大蔵へ廻って狂歌連を祝さとヨ 下女「ヲヤ
左様でござりますかヱ彼方が今度を案のでござりますかえ

由「ゑゝ」下女「あるこ君は会幹をおれたのさうな来さのでこざいますね」子由「ムゝ二河町の初音園を新宿のん源ふれで呉ろ」こゝて十時居うゝも源吉を付てやるとさうゝいやうこゝも云ねゝ」下女「大抵でございますくどうでお勝で居ますからゝ結ふ来てお世話あゝ結ふ来てお世話ゝ駆ぶ回ございますト横を出てゆく由「あゝ間まゝ入て炉の」下女「第五番ざんなまこゝろあるこゝろあるこゝろ」横浜町のゝ百姓ぶるおしらせまゝゝ」由「十二時分さんぐれ今

まこゝとふ来ぶこゝろ来でゝすおゝゝゝこの通れ行ゝ
ゝ焼ぶどふ来ゝこゝろのぐこゝろ居ますてセイくゝゝてゝゝ
ゝやうすね由「ゑゝ元今来ハさア思ひも能ふ人だゝ来
ゝゝ来ゝゝゝ河周ぐゝ来中黄ゝ来ゝ源ぐゝ三備ゝも
あゝゝゝゝゝゝお通ゝさゝこゝて連て来ゝ」下女「ハイ居
でぐさいますねゝト」ゝゝふぶゝゝ沢やぐて源の来ゝ来ゝ来」由「サ
ゝ房さん来方ゝお通ゝ入ゝ来ゝ何ぐ来ゝ来ゝ来ゝ来ゝ
ゝくどのさゝゝふ来ゝけゝゝ由ゝ脇ゝふゝんゝゝゝゝゝゝ

まりて高ぶるも
いくぬうとおもふ　由「こりゃ何ぞうるさく
うるさく一段近ぶう何ぞうるさくうるさく
あるくるぬぐうるさくうるさく
ぬぐけをばうるさくうるさくおぼうるけ　由「
あれども浜町をうぐうるさく
ぐうるさくうるさく浜町へ行ぐ宜ふ
うるさくうるさく　女「フヽト　ふきやうまくうるさくうるさくたまくうるさく
うるさくうるさくと　田「ヲヤ
浜町も羽織も江のぐうるさく待ぐうるさく
いちぐん　お梅「うるさくうるさく
一組うるさくうるさくうるさく　孝「さうるさくうるさく
「ヲホヽヽ　下女「ヲホヽヽ　義旦「歌さうるさくうるさくうるさく
お呉とこうるさくうるさくもうるさくうるさくうるさくうるさくうるさく
うるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさく
うるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさく
うるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさくうるさく
ヲホヽヽ　由「ドレ〳〵歌さうるさくうるさくうるさくうるさくうるさく
うるさくうるさくうるさくうるさく

屋の主人も新吾様もあるゝ又浅草のようゝの屋の
ようゝ美婦もあるゝ老母

「ホヽ我あゝ老て進ぜう

由「大ゝ思ふうけゝ思ひて喰ひたがるゝ

何でも喰ものでも無と動ろ

「ホヽ品姫ゴヨノウ

ヲヤヽヽ主人様さんあんまりをあつらへやらをて私共の思い

ニアル聞ツて主人のことゞありますのゝ

「イヽヱどう世

間の風聞の思ひふらもあいませんゝだまつてあます

ヲヤ彼ゆがおがおがまんれ

由「ムヽ色が変て来ぬ

「ハイトまあ

「サア今ようゝ歌ゝノト

キヤアくと

たあまるたゞこの彼ゝ何ゝ

由「アヽ宜しの捨ゝ

「

きれあけると由ゝ動いるを

ヲヤを色ハ有来のでおざいますヨト

ゝんとまるを

由「あんざ

と紙あ美ゞ用のうゝ唄ゝつまゝねくりのを大騒ゝ

あアドレくゝ

「

あの長老様と和尚様老ぶる蔦のそ

ゝ

ゝ

ゝ

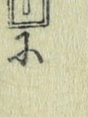
拵ぶ梅吉の下男さらへさと貳く秋孔雀きう

どやアるのうらい

丑「ムこあるやア梅幕里社中で作さのご世書の作者わご序を作さふ唱歌図金の初編ふアんえさっけ何処ろ〜此ごれ作りのを写して来さのご梅「それハ私の友達のお據さんご書て呉すーこシでござのまんョ丑「然ろ。ニアさうりくびお前ふアんせるりのご有ろこアノ再昨後河ろ〜呉あわ可ームッナ」下女「アノ用事間へ

書ハ用箱第八下ふ男しろること家ごあるこの上面ハ第子板の蓋ふ似ごる乳を開ぬきこと開ふ用箱の二字を下し第の四方ふ散紅葉の模様を三五乃り是ハ今の状さしとれあるごく他ろりきさん書状を入ろるりのありまご入用の書ハ用の孔へ入るも天矢用ハ箱の孔へ入方編第の中ふ隔板あり

あるを見て用箱の名あり更ふ古事ふ列漆の古柳亭種彦ご隨筆ふ用箱第と題名しふ邸是あり歌ふを



形ちを表せりこハ注もあるこあごろくの逆ふあるこ称ども書ごふこも天矢

大江戸の児女を主ふ天王ものこ梅里宗郎ごんごくと

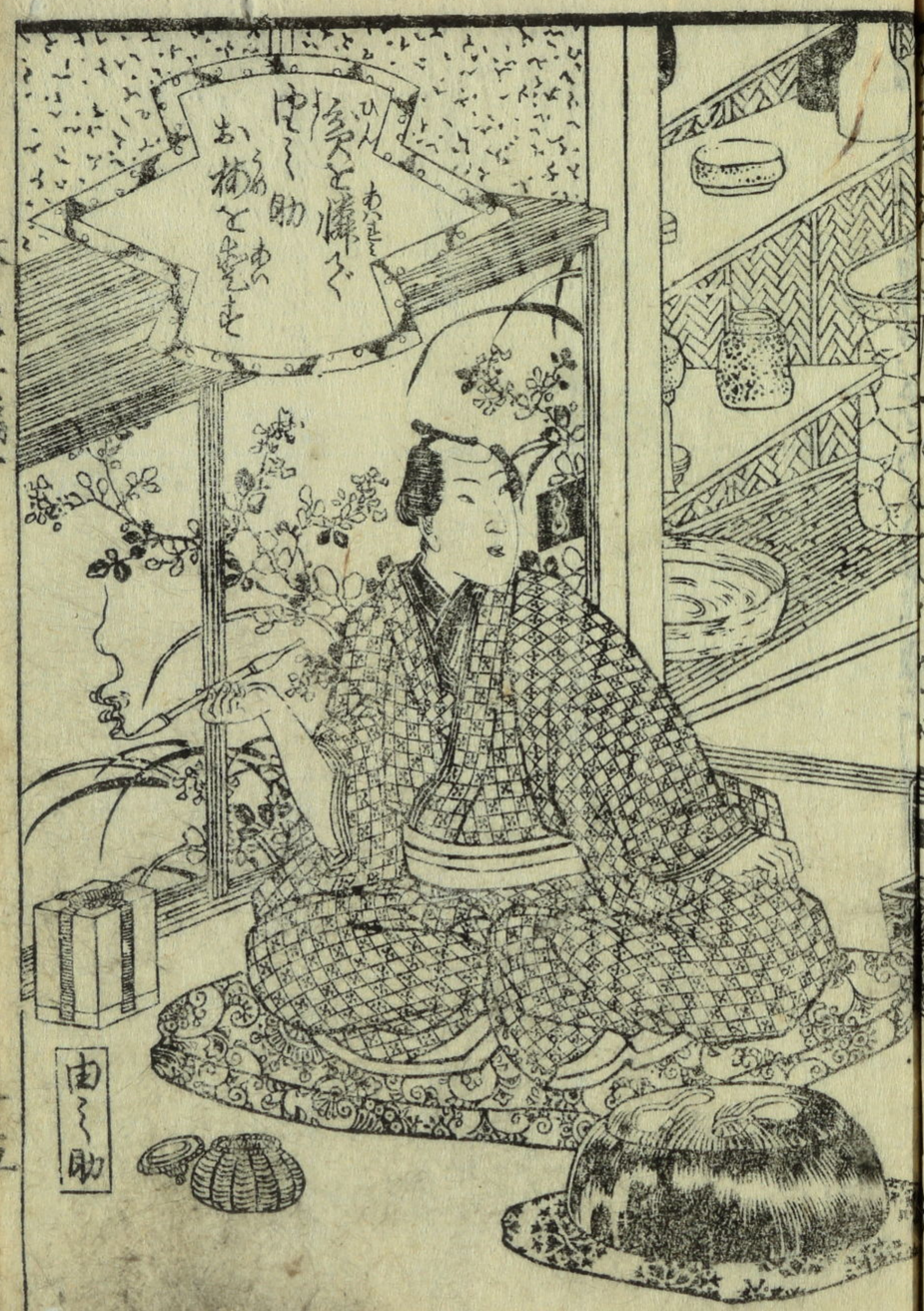
あるこごもうあるとなるこひねひを　うんびんまを蓋あけてみる用箱第　丁寿

由「ムヽ然也ヽヽアノ是ノおはゝさん後河の彦兵ヽいへ
山初市といへ豪家の主人ぐ彦阜と号て志の親友サ
そのまゝ又山ゐ一の朋友ホ佐弥兵衛と号人ぐこ一
らくとのぐに云して思いせぶりの陽臨といふソウ
八幡ぐものく喝ぐヨ已ぐ憂で笑ちさう

「家一さ一様ヽまぐ父ヽの神ヽまぐ家ヽ生ヽ
をヽヽけて生ヽ母ヽ形び孫のヽのまヽ不孔
ヽヽ家ヽまヽヽ家ヽ母ヽ

ヽヽれヽヽヽヽヽ猫の恋

「ヲヤヽヽ大さう降風ホ作ヽヽヽヽヽヽ」由「うまく作ヽ
ノウ岩ホといヽヽヽヽヽ地の陸橋のあるヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ
トこのうち家もうてヽまひ」「ヽヽ見ヽ形ヽ私ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ


由之助

おうめ

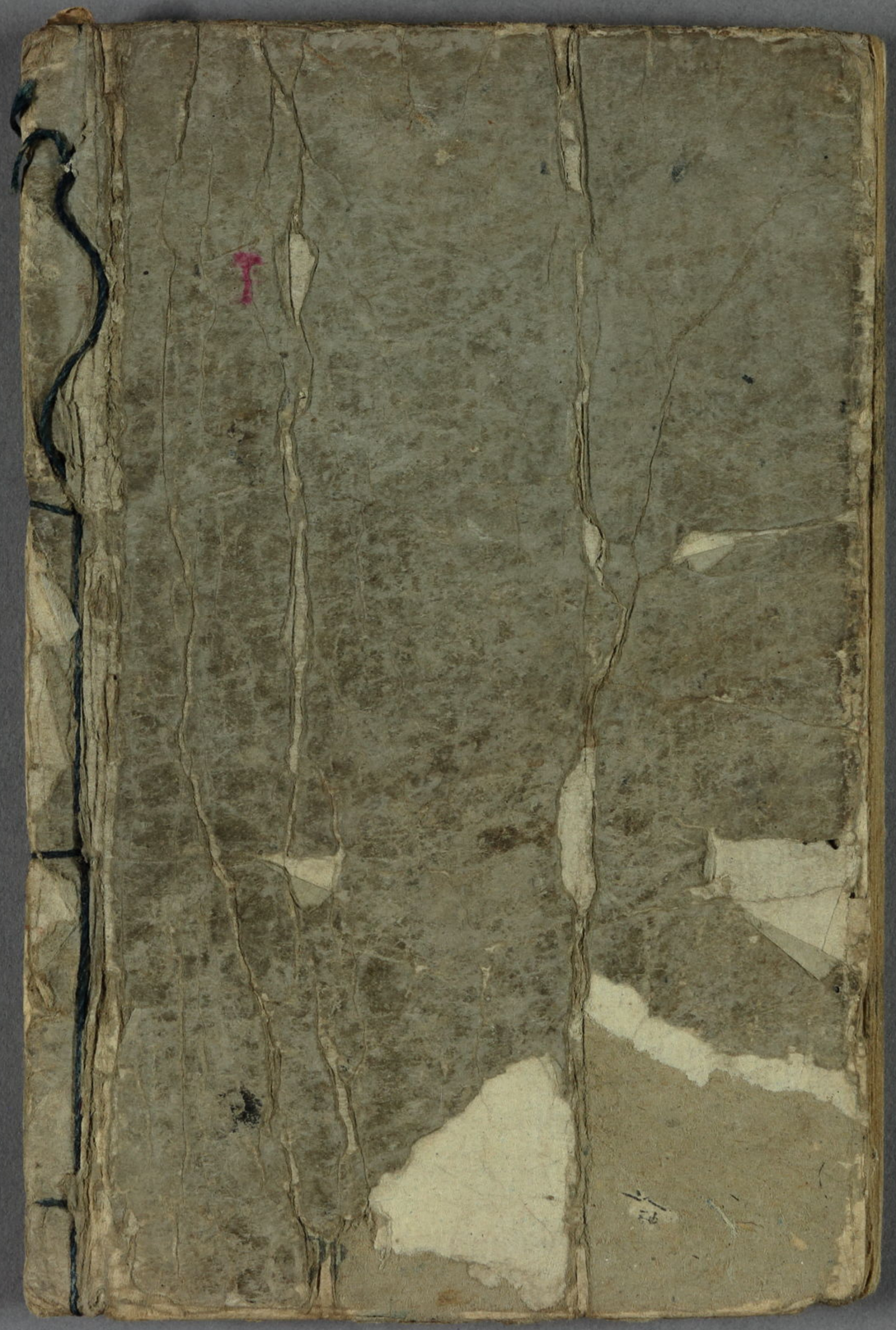
だうりやう〳〵ちやう〳〵の毒ざう〳〵此爰い実の汗をうつして
やうりやと思つてヨどもの〳〵ト　ろくぶのところ　をちふとうく　「てそれでも　由　「
それでもあんざ爰るこよさうう　「アレ爰じやアあり
ませんが子おこどんげあんとうあるひませうう　「るんと
おりつても宜やあ老女ざうう　「そをでも私〳〵やア
まことおろが爰うこざいまいそれお此ろうろいろんを
ことを云て私を嬲つていけませんりのを　由　「ハ〳〵然う
彼女アあるがまうう老女

おまざ老女とトスおどじやアありませんさうる　由　「ナニさう
でもねへ　「それでもまと　ろうろって　由　「何をうろうのざ　「
フ〳〵おうろいことがありまいヨ　由　「あんざ笑いとひとりで
業知してゐるだろうじやアあ解　「アノ子。アノウ
おさんどんをそ君お惚きッてあまいヨ　由　「ハ〳〵あんざナ
だうざ云　「イ〳〵エををでも此ろ半爰ぶお風
をろてお助こあさいまう〳〵と問もアノ大師さうる
お業ざちをあまう〳〵てそをハモウとんなお業を付て

困病ひ〳〵まゝ〳〵こうきをハあまりせん実ぐあります
それぐ〳〵下ぎゐでおきをあさのまゝ〳〵ふホ〳〵由「うそ
さうおこゝをゝ云あさんなぞろ〳〵〳〵」梅「それでも実ぐで
ぐざいますものをそれぐ〳〵此ごろ此ごろやア蔭でゝさら〳〵ホ
どんなよあまをせう私〳〵やアモウ毒の毒でるうまをせんハ
由「つま〳〵極くことを云極くおもゝ〳〵ろくも極く」梅「ほ
ま〳〵あうノのうまをせんョおんなるホ思て居まをりのを
下ぎゐでおやんあさ〳〵まゝ〳〵ふるぐ〳〵由「フン

豆ぐんふ志稲」ア。モウ志粕ヱをいふと切ること」梅「ア。
ソレハもぐッこゝ〳〵ごさいまハ由「いつまで生稲ホ搗い
ト行ゝ行ゝ」黙の折節天井の嵐ガヨフ〳〵〳〵
下女「ア、モウそちこち実刻ごさらふトレ孫仕ゝでも
志ませうト、こうり〳〵ふいの火辞の火もモウ消〳〵ても
ようらうろ〳〵ラトいふ時困ホ「ア、イヨト遠ホ濡る声
書さ人息のもぐこホ毫笑もぞぐむ他者ガ乳をこまして

巻を接ての遠りの梅陽で あぐゝ小重編しこそ
よりお梅四ゝ助の爲ゝ和合板藤もあく。安交小あゝ
あゝ毛ねゝ見お雪といふ徳兵衛の箸を搖ゝ居二所ゝ
お菊の縁月を如何ぞまるゝ是江戸と鶴紙福で
三編巳編小お著し。續て出板仕ひ。あを十方の看官
ゝ小梅星爺おとゝ方を取上ゝ。相も不昔
仲員員小先親あゝせぬひ孫ゝ

春色辰巳海巻之六 畢

赤堀